
日本地球化学会ニュース

No .172

2003 .2 .1

主な記事

●学会記事

- 2003年度日本地球化学会年会のお知らせ(1)
- 第13回ゴールドシュミット国際会議 (Goldschmidt 2003)
日本開催のお知らせ
- 地球惑星科学関連学会2003年合同大会特別セッションのご案内
- 2002年度日本地球化学会年会の報告
- 研連議事録

●その他のシンポジウム，人事公募等の各種情報のお知らせ

- 訃報

現在，日本地球化学会のホームページを国立情報学研究所ホームページ内の学協会情報発信サービスの中で公開しております。研究助成，シンポジウム，人事公募等の各種情報は随時更新しておりますのでそちらをご覧ください。

URL アドレスは，<http://wwwsoc.nii.ac.jp/gsj2/index.html> です。

また，独自ドメイン名を取得いたしましたので，暫定的ですがこちらも公開中です。

URL アドレスは，<http://www.geochem.jp/>です。

2003年度日本地球化学会年会のお知らせ⁽¹⁾

主催：日本地球化学会
共催：日本化学会
後援：くらしき作陽大学
倉敷市
会期：2003年9月7日(日)

8月下旬(日程調整中)に倉敷市で一般市民向けの公開講演会(どなたでも参加歓迎)を開催します。

会場：くらしき作陽大学(山陽本線/山陽新幹線の新倉敷駅から徒歩12分)1号館

内容：一般講演(ポスター、およびシンポジウム形式の口頭発表*)、総会

講演申し込み締切り：2003年6月10日(火) 17:00

講演要旨受け付け締切り：2003年7月11日(金) 必着
(ホームページ)：2003年7月15日(火) 17:00

参加申し込み締切り：2003年8月11日(月) 17:00

これらの申し込みは、いずれも学会のホームページ上から行なう事を検討しています。詳細は次号のニュースを御覧下さい。

学会賞などの受賞講演は、Goldschmidt 国際会議(講演は9月8日から12日まで)の中で行うことを予定しております。

*今年にはポスター発表を中心にしますが、9月7日の午前中を使い、研究会やシンポジウムが可能です。その課題を募集します。提案締め切りは、4月1日(火)(メール可)で、次回の本ニュース“2003年度地球化学会年会のお知らせ⁽²⁾”に課題名を発表します。応募者は、あらかじめ主幹となる講演者の目処を付け、その課題での一般申し込みがあればそれを受け入れて下さい。

年会連絡先：

〒464 8602 名古屋市千種区不老町
名古屋大学環境学研究科地球環境科学(理学部)
田中 剛
Tel: 052 789 2595, Fax: 052 789 3033
e-mail: tanaka@eps.nagoya-u.ac.jp

第13回ゴールドシュミット国際会議 (Goldschmidt 2003) 日本開催のお知らせ

参加登録・講演要旨受付開始

開催時期：2003年9月7日(日)~12日(金)

開催場所：くらしき作陽大学(倉敷市)

主催：日本地球化学会・The Geochemical Society・
The European Association for Geochemistry・
The Mineralogical Society of America

後援：独産業技術総合研究所・くらしき作陽大学・倉敷市・岡山県

セカンドサーキュラーを会議 website 上で発行し、参加登録および講演要旨の受付を開始しました。
<http://www.ics-inc.co.jp/gold2003/>をご覧ください。

参加登録の受付 日本地球化学会の会員は参加登録料の割引があり、早期登録料(2003年7月7日まで)は一般28,000円、学生13,000円です。さらに、会議で発表する場合は、別途講演要旨投稿料12,000円の払込が必要です。講演要旨は、会場で配布されるCD-ROMに加え、*Geochimica et Cosmochimica Acta* の supplemental issue として印刷発行されます。

すべての国の学生および財政的困難のある国の35歳以下の研究者には Grant を用意しました。講演要旨の審査に合格すれば、参加登録料と講演要旨投稿料に相当する金額が会場で支給されます(応募締め切り2003年4月14日)。

講演要旨の受付

以下のように9件の *General Symposia* , 55件の *Special Symposia* が確定しました。各セッションの Chair や詳しい内容は会議 website をご覧ください。一般の講演申し込み締め切りは2003年5月5日です。

General Symposia

- G 01. Chemical Oceanography
- G 02. Climate Change
- G 03. Biogeochemistry and Organic Geochemistry
- G 04. Environmental Geochemistry
- G 05. Sedimentary Geochemistry
- G 06. Igneous/Metamorphic Geochemistry
- G 07. Planets and Meteorites
- G 08. Physics and Chemistry of Minerals
- G 09. Volcanic Gases, Fluids and Ore Deposits

Special Symposia

<Marine and Atmosphere Geochemistry, and Cli-

mate Change>

S 01. High-resolutional paleoceanography in the western Pacific during late Quaternary (IMAGES activity)

S 02. Biogeochemical cycling of trace elements and isotopes in the ocean and applications to constrain the contemporary marine processes (GEOSECS II)

S 03. Marine geochemistry of the rare earths, actinides and noble metals: The present and past oceans

S 04. Long-range atmospheric transport of terrestrial materials over the ocean

S 05. Atmospheric aerosols and reactive gases: Their impacts on atmospheric composition and air quality over the Asian and Pacific regions

<Biogeochemistry>

S 06. Global Biogeochemical Cycles

S 07. Advances in the Use of Stable isotopes to Study the Global Methane Cycle

S 08. Assessing biogeochemical cycles using nitrogen isotopes

S 09. Progress in subsurface biosphere and its development through Ocean Drilling; over bridging from ODP to IODP

S 10. Biogeochemistry of Trace Metals in Shallow Estuarine Systems and Coastal Lagoons

S 11. The role of bacterial surfaces in chemical processes of metal ions in the environment

S 12. Weathering and the biosphere

<Origin and Evolution of Life>

S 13. Origins and distribution of life in the Universe

S 14. Geochemistry of Biological Radiation and Extinction

<Sedimentary Geochemistry>

S 15. Geochemical Role of Available Humus or Dissolved Organic Matter (DOM) in soils and sediments

S 16. Chemical Diagenetic Processes in Sediments and Sedimentary Geochemistry

S 17. Biogeochemistry and paleoenvironmental implications of metals in marine sediments

S 18. Multivariate methods and heterogeneity in geochemical/hydrochemical surveys

S 19. Geochemistry of Seepage: subduction products from modern to past

S 20. Geology, Geochemistry, and Microbiology of Natural Gas Hydrates and Related Methane Seeps

<Isotope Geochemistry>

S 21. In Search of Isotopic Biosignatures

S 22. Non-Traditional Stable Isotopes

S 23. Molecular Isotope Geochemistry - From Natural to Anthropogenic

S 24. New advances in high precision trace element and isotopic analysis

S 25. Laser ablation ICP-MS and MC-ICPMS with applications in Earth Sciences

S 26. Unraveling Geological Processes by Noble Gas Isotopes

S 27. Lithium isotope geochemistry: from oceans to mantle

S 28. Lanthanide Tetrad Effect and New Trends in REE Geochemistry

<Crustal Fluids, Mineralization, and Natural Hazards>

S 29. Following Giggenbach's Rulers and Witnesses of Crustal Fluids: Volcanic, Geothermal and Ore Systems

S 30. Geochronology of ore formation processes and ore genesis in relation to the magma generation

S 31. Geochemistry linked to the reduction of natural hazards

<Mineral Sciences and Waste Confinement>

S 32. Nano materials/minerals in geoscience by TEM

S 33. Mineral-fluid interfaces: molecular-scale insights to macroscopic processes

S 34. Geochemical Immobilization and Long-Term Isolation of Waste

<Crust, Mantle, and Core>

S 35. Metamorphic Processes: Diffusion, Reaction and Fluid Flow

- S 36. Subduction zone processes and global material circulation
- S 37. HP to UHP Metamorphic Mass Transfer and Chemical Cycling in Convergent Margins
- S 38. Mantle heterogeneity and dynamics of mantle plumes
- S 39. Composition, Processes and Structure of the Mantle
- S 40. Hot Spots and Global Mantle Circulation
- S 41. Structure and properties of silicate melts and fluids
- S 42. Geochemistry of diamond, a window to the deep earth
- S 43. Mantle-Core Differentiation and Evolution from a Deep Magma Ocean

<Early Earth>

- S 44. New Views of Old Rocks : The Hadean and Early Archean Earth
- S 45. Co-evolution of the biosphere, atmosphere, hydrosphere, and lithosphere in the early Earth
- S 46. New insights into early Earth's environments from the multiple sulfur isotope system

<Meteorites and Solar System>

- S 47. Early solar system processes
- S 48. Martian Meteorites and the Evolution of their Parent Body
- S 49. Cosmogenic Nuclides Produced in situ in Solar System Matter

<Geochronology>

- S 50. Hadean geochronology : Establishing the first 500 Ma of Earth history
- S 51. Thermochronometry : recent developments in calibrating (and intercalibrating) the thermal sensitivity of isotopic dating techniques
- S 52. Geochronological decay constants
- S 53. Dating methods for Quaternary Geochronology
- S 54. Archaeological Geochemistry : Isotopically decoding prehistoric human life and nature

<Geochemical Mapping>

- S 55. Geochemical mapping - Global and local geochemical baseline, exploration and environmental pollution- (Poster only)

今後の主なスケジュール

- 2003年 1月下旬 Second Circular の発行
- 4月14日 Grant 応募者 Abstracts 締め切り
プリントアウト版 Abstracts 投稿締め切り
- 5月5日 電子版 Abstracts 投稿締め切り
- 7月7日 事前登録締め切り, 宿泊・エキスカーション等申し込み期限
- 9月7~12日 第13回 Goldschmidt Conference (倉敷)

連絡先 : e-mail : gold 2003@ics-inc.co.jp

(第13回ゴールドシュミット国際会議組織委員会
委員長 松久幸敬)

**地球惑星科学関連学会2003年合同大会
特別セッションのご案内**

地球惑星科学関連学会の合同大会が、2003年5月26日(月)から29(木)まで、幕張メッセの国際会議場で開かれます。私たちは、この合同大会で、「アジア内陸起源の風送ダストの発生・輸送過程と影響」という特別セッションを設けました。ここ数年日本で観測される黄砂の頻度は急速に増加していますし、黄砂をもたらす風送ダストは、発生域の農業生産や生活環境に影響を与えるばかりでなく、全地球的な気候にも重大な影響を及ぼしています。本セッションでは、アジア内陸起源の風送ダストについて、発生域の現地観測、拡散予測モデル、東アジア一帯への輸送機構、風送ダストの及ぼす様々な影響などを含めた議論を行いたいと思っておりますので、皆様の積極的な参加をお願いいたします。

セッション名 : アジア内陸起源の風送ダストの発生・輸送過程と影響

セッション番号 : J 085

代表コンピーナー : 矢吹貞代 (理研)

共同コンピーナー : 金井豊 (産総研)・大田充恒 (産総研)・高橋嘉夫 (広島大学)

詳しいことは合同大会のホームページ (<http://epsu.jp/>) をみていただければわかりますが、今後の日程は以下のようになっています。

1. 予稿集原稿投稿

早期締切り：2003/2/14(金) 24:00

投稿料 1,500円

最終締切り：2003/2/21(金) 24:00

投稿料 3,000円

2. 大会参加登録

全日程参加：2003/3/20(木) 17:00

一般：10,000円 学生：7,000円

1日のみ参加：2003/5/9(金) 17:00

一般・学生：5,000円

合同大会は投稿料がかかります。しかも、早期と一般では、投稿料金が倍になります。

投稿原稿は、2003/2/21まででしたら、Web上で、変更、取消しが可能ですので、なるべく早めに原稿の投稿をお願いします。

投稿はWeb上で行います。投稿の手順については、大会のホームページを見ていただければわかりますが、共著者全員について、個人情報登録する必要があります、少々面倒です。

1日のみ参加の方が多いかと思いますが、特別セッションの日程がまだ決まりませんので、決まり次第ご連絡いたします。

2002年度日本地球化学会年会の報告

日本地球化学会実行委員会委員長
坂元隼雄（鹿児島大学・理）

2002年度の日本地球化学会年会第49回年会（創立50周年記念年会）は、9月26日(木)から9月28日(土)の3日間にわたって、鹿児島大学郡元キャンパス（総合教育研究棟・共通教育棟・稲盛会館）を会場として開催した。鹿児島での年会は、1980年以来22年ぶりとなった。

創立50周年を記念して学会開催の前日（9月25日）には、一般市民の方々を対象とした講演「豊かさと環境：かけがえのない地球を救おう」を企画・実施した。

また、学会中（27日）には、50周年記念事業として記念講演・地球化学研究を支えてこられた方々や企業等の表彰式が行われた。

年会の参加登録者総数は310名で、事前登録者214名（内学生81名）、当日登録者96名（内学生38名）であった。

講演総数は250件、うち特別講演2件、学会賞など受賞講演4件、一般講演149件、ポスターによる発表が95件であった。

特別講演は、東京工業大学理学部地球惑星科学科高橋栄一氏が「ホットスポット大研究：地球化学研究の一つの可能性」、独立行政法人国立環境研究所森田昌敏氏が「元素の地球化学的循環：その環境的意味と追跡法」と題して、ご講演された。

また、2002年度の学会賞等の受賞者講演は、奨励賞としては、高橋嘉夫氏と横山祐典氏、学会賞としては、蒲生俊敬氏が、そして柴田賞では、昨年度の受賞者である増田彰正会員が体調を回復され、ご講演された。

なお、今回の年会は50周年記念大会であったため、日程中にほぼ一日分の時間枠を記念事業のために確保する必要が生じた。これに対して実行委員会では、参加者の負担を考慮して3日間という例年の年会日程を変えない方針を決め、年会全体の簡素化を図った。まず一般講演と、特別講演や記念事業など、内容に応じて実施日を切り離した。また、会場確保の都合上、一般講演の会場と50周年記念事業の会場とを分けることになり、記念事業（50周年記念講演会、記念顕彰、学会賞等受賞講演など）を年会第2日目にまとめて大講堂で実施し、第1日目と第3日目に一般講演会を複数の小会場で実施した。ポスターセッションも二日間の日程で行われたが、記念事業への参加者の利便性を考慮し、二日目のセッションは記念事業会場で記念式典開始前（学会第2日）に実施したが、この措置により記念事業への多数の参加につながったと思われる。上げることができたのではないと思われる。

また、今回は学会事務の省力化・合理化を目指して、学会ウェブページ担当の米田氏・小林氏のご協力を得て年会ウェブページを立ち上げ、講演申し込み・参加登録などを行った。この際発生した問題としては、講演申し込み時点においてCGIによるトラブルが発生し、講演予定者に多大なご迷惑をおかけしたことがあげられる。ただし、これはe-mailで申し込みを受け付けることで対応することができた。その他は特に大過無く、少ないマンパワーの中で成功裏に年会の幕を閉じることができた。年会業務のIT化は、世の潮流とも相まって今後とも押し進めていくべき課題

であるが、本年会での経験から、インターネットの活用は、年会開催に係る効果的な情報提供および参加・講演申し込みの簡便かつ円滑な業務遂行のために極めて効果的であることが明らかになった。年会業務へのインターネットの活用による利点としては、まず従来の学会誌による一方的、かつタイムラグの避けがたい情報提供法を、即時的かつ双方向的なものに刷新することができることが挙げられる。さらに郵便発送のような手作業に頼ってきた年会事務の取りまとめの労力とコストを大幅に削減するとともに、年会運営活動の全体的な利便性の向上に資することも期待される。

日本地球化学会2003倉敷年会的 内容に関するアンケート結果

田中 剛（2003年会準備委員会）

2003年9月7日（受付）から12日にかけて倉敷市でゴールドシュミット国際会議が開かれます。2003年度学会年会の場所と期日は、2001年のアンケート結果（ニュース167号に掲載）などに基づき、この国際会議に合わせて、9月7日(日)に同じくらしき作陽大学で開く事にしました。年会の内容については2002年の鹿児島年会においてアンケートを行いました。結果を報告します。

- 1) あなたは、地球化学会の会員でしょうか？（会員／非会員にかかわらず、両方の会議に御出席いただけます）
会員です（12） 会員ではない（6）
- 2) Goldschmidt 国際会議（2003年9月7～12日）への出席御予定は？
出席する（7） 決めていないがどちらかといえ出席する（8） 出席しない（2）
どちらかといえ出席しない（1）
- 3) 来年の倉敷年会（9月7日予定）への出席御予定は？
出席する（5） 決めていないがどちらかといえ出席する（7） 出席しない（1）
どちらかといえ出席しない（4）
- 4) 倉敷年会での発表（ポスター）の御予定は？
発表する（1） 決めていないがどちらかといえ発表する（4） 発表しない（4）
どちらかといえ発表しない（8）
- 5) 年会準備委員会では、年会での発表はポスターの

みを考えていますが、
それでよい（13） ぜひ口頭発表を行ないたい（3）

残念ながら回答数が少ないが、回答数から以下のように類推できる。

2002年会出席者の83%が Goldschmidt 国際会議への出席を考えている事から、年会の常連から300名、周辺の国内関連分野から100名以上の出席が予想され、Goldschmidt 準備委員会が予想している国内からの出席数400名は、ほぼ的を得ている。同様の比例計算から、2003倉敷年会への出席者は200名前後と予想される。発表者（ポスター）は100名前後と予想されるが、Goldschmidt 国際会議との連続発表を考える発表者もあり、増加も予想される。口頭発表を希望された回答は3件であるが、同様な比例計算からは、30～40件の口頭発表希望に対応する。ただ、30～40件の口頭発表を全分野に散らばって行えば、聴衆や討論がきわめて少ない講演も予想されるので、2003年倉敷年会は、ポスター発表を中心とするが、あらかじめテーマを絞ったシンポジウム形式の口頭発表課題を公募することとした。提案者がその分野の講演者を取りまとめる。（本ニュースの2003年会記事を参照）

年会に係る受付業務・情報発信の IT 化

2002年度の年会事例からの提言

2002年度日本地球化学会年会 実行委員会
事務局 穴澤浩郎

従来日本地球化学会では、年会の実施に当たり、開催する内容および日程の策定、情報の提供、受付業務、講演要旨集のとりまとめと出版、会場確保、年会当日の人員提供等、年会運営のすべてについて、年会を担当する機関もしくは大学（以下、LOC と略す）が請け負ってきた。このような多大な負担に対し、各 LOC では昨今の情報技術を導入することで年会業務の効率化を図るようになり、2000年度の山形大会から年会受付の一部がウェブページ上で実施され、2001年度の東京大会では講演申し込みや事前参加登録のすべてがウェブページ上で行われるようになった。これらの試みは、時代の変化に即した年会業務の総合的な簡素化と LOC の担う作業負担の軽減につながるものであり、年会受付業務と情報提供の効率化に一定の成果を挙げてきた。しかし、年会受付の際には申込者が使

用するブラウザやメールソフト、あるいはOSなどのシステム環境により、送信内容の欠落や文字化け、あるいは受付情報の取りまとめ時における人為的なミス等、種々の問題が発生した。また、これらウェブページの作成は各LOC(2000年：山形大学,2001年：学習院大学)が独自に行い、それぞれのLOCの事情に特化したウェブページ運営を実施していたため、ページ内容やフォーマットをはじめから作り直さなければならない状態にあった。このように各LOCが毎回独自のウェブサイトを作成していくというやり方では、せっかくの年会ウェブページ作成の努力が引き継がれること無く、まさに賽の河原の石積状態が続くことになりかねない。

おりしも2002年初頭、本学会では学会ウェブページの刷新と学会独自のサーバによる運用が決まり、将来的には、従来LOCが独自に作成・運営してきた年会用のウェブページもこのサイバースペース内に設置することが検討されていた。また、2002年度の年会は日本地球化学会50周年記念大会となり、例年の年会に比べてLOCが請け負う作業負担が大幅に増加することが予想され、人的資源が絶対的に不足している本LOCでは、昨今の情報技術(IT)によらない手作業での年会の実施は極めて困難であることが明らかであった。

そこで今回、2002年度年会事務局では年会を開催するに当たり、過去の教訓を踏まえた上で学会本部と連携をとりつつ、次回以降の年会でも利用に供しうような汎用性の高いウェブページを作成して年会の準備・運営を行うこととした。ウェブページ作成に当たっては、為しうる限り単純な階層構造をとるようにし、コンテンツの書き換えだけで他の年会でも使用可能なものにするように心がけ、今後の年会ウェブページのプロトタイプとしての役割を果たすようにした。また将来的には、学会ウェブサーバ上で年会業務が行われることを考慮し、学会ウェブページ担当の米田成一・小林貴之両氏のご協力を得て、学会本部とLOCとの業務の切り分けと作業の枠組みを模索した。これら一連の年会業務を通してITによる年会運営のあり方を検討し、一定の成果を見たのでここに報告する。

IT化の目的

年会業務へのインターネットの活用による利点としては、まずその情報の双方向性(インタラクティブ)と即時性が挙げられる。IT技術の導入により、

従来の学会誌による一方的、かつタイムラグの避けがたい情報提供法を、ウェブページや電子メールを活用した双方向性に富みかつ即時性の高いものに刷新することができる。また、郵便発送のような手作業に頼ってきた年会事務の取りまとめの労力とコストを大幅に削減することも期待される。年会業務のIT化の目的は、IT技術にもとづくシステムの構築・運用により、参加者への効果的な情報提供および参加・講演申し込みの簡便かつ円滑な仕組みを提供し、年会運営活動の全体的な利便性の向上に資することにある。

ウェブページ作成に係る作業分担の検討

年会ウェブページの持続的・効率的な運用には、学会活動全体を所管し、かつ将来的に年会ウェブサーバを所有・運営する学会本部との協力関係が欠かせない。また、年会に係る団体は共催、後援を問わず多数存在し、その中には直接ウェブページの運用に係る団体もある。以下に役割分担に関する基本的な考え方を示す。

(1) 年会事務局(LOC)

年会を担当する研究機関や大学の受け入れ態勢の違いにより、年会の内容は大幅に異なるため、必然的にウェブページに掲載する内容も異ならざるを得ない。また、IT化の重要な特長である「情報の即時性」を最大限に発揮するためには、情報の所持者と発信者とが緊密な位置関係を保つか、同一であることが望ましい。したがって、ウェブページのコンテンツ作成は、基本的にLOCが担当するべきであろう。

(2) 学会本部

過去においてウェブページを用いた年会運営で生じた問題は、参加申込みや講演申込みにおいて発生している。基本的にこういった申込みに関する部分は、年会主催者と年会参加者の間で双方向(インタラクティブ)の情報交換が可能な部分であり、ウェブページ作成上、技術的に困難であるのみならず、運営上においても最も煩雑かつ神経を要する部分である。それと同時に、この部分はある程度汎用性を持たせることが可能な部位であり、一度書式を設定すれば、複数年度にわたって継続して運用することができる。したがって、講演申込みや参加申込みなどのインタラクティブなウェブページに関しては、専任の学会ウェブページ担当が継続して作成・運用することで、年会担当側側の負担を大幅に削減されるのみならず、参加申込みや講演申込みの際、ウェブページ作成に不慣れな

ために発生する様々な問題が解決されることが期待される。

(3) その他

年会運営に直接的に係る機関・団体としては、共催・後援団体や、旅行手配会社などが挙げられる。これらの団体に直接的に係り合うのは基本的に LOC である上、これら団体の年会ウェブページへの関与の仕方は、一方的な情報発信（宣伝・広告など）となることが多く、技術的に簡単なページ作成でこと足り。したがって、これらの団体に係るウェブページについては、LOC が携わるのが適当である。これら諸団体が年会のための旅行会社などの場合は、旅行申し込みなどのインターラクティブなページが必要となることもあるが、その場合でも、当該会社の URL にリンクするだけで済むことが多いため、さほどの問題とはなりえない。

実作業に当たっては、上記検討結果に従い、初期段階から学会ウェブページ担当者と密接な連絡を取り合いながら、全体的な枠組みや内容（コンテンツ）および役割分担について情報交換をしつつ、ページの作成と運用を進めた。

実際のウェブページの作成と運用

(1) 作業の具体的な枠組み

今回ウェブページは、上記視点に立ち、学会ウェブページ担当が「双方向的なウェブページ」を作成し、「講演申し込み」および「参加予約申し込み（事前受付）」の受付を行い、それ以外の情報発信部は本 LOC が作成し、上記ウェブページにリンクをはることで年会ウェブページ内に導入した。また、今回は大都市圏から離れた地での年会開催となったため、遠来の参加者のために旅行・宿泊のページも作成したが、その運用は鹿児島大学生協に依頼した。

(2) ウェブページの内容

本 LOC では、情報発信に特化したウェブページを作成し、年会の基礎的な情報、および最新の情報を以下の項目について随時提供した。

年会のテーマ、主催、共催、後援

年会の案内：会場、年会日程、受付日程、セッション内容、参加費、連絡先

講演ならびに参加申し込みの方法

講演要旨の形式ならびに送付方法

会場の案内

宿泊の案内（および鹿児島大学生協へのリンク）

問合せ先

講演申し込み（学会ニュース担当作成のページへのリンク）

事前参加登録（学会ニュース担当作成のページへのリンク）

プログラム（年会タイムテーブル、講演題目と日程の詳細）

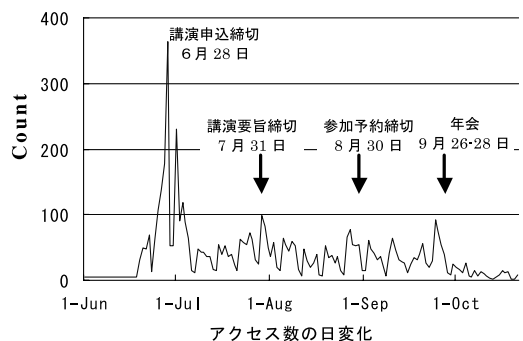
その他（50周年記念公開講演会の要旨、学会誌における年会関連記事など）

今回は、インターネットにおける「双方向性」と「即時性」を生かして、各種受付業務をウェブページ上で実施したが、講演要旨については従来の郵送方式に限定し、ハードコピーによるオフセット印刷で対応した。これは、雑多なワープロソフトや OS が氾濫している現段階で年会事務局側が学会員の使用する全ての OS 環境を把握し、それに対応することは不可能であるということが第一義として挙げられる。また、PDF ファイルなどの汎用性が高いファイルで受付を実施するにしても、PDF 作成環境にない会員も少なくないことと、ファイル形式の混乱から執筆者の意図するものとは異なった文書を LOC 側で印刷・出版してしまうことも危惧された。このため、現段階での講演要旨の電子ファイルでの受付は時期尚早と判断し、今回は見送ることにした。電子ファイルでの講演要旨の受付は今後の検討課題である。

(3) アクセスログによる閲覧者の分類と推移

年会事務局では、本ウェブページを今後の学会ウェブページ運用にあたっての試金石との位置づけをしているため、アクセスカウンターとログファイルによりアクセス状況の把握に努めた。以下に6月1日から10月31日までのアクセスログ解析の結果を示す。

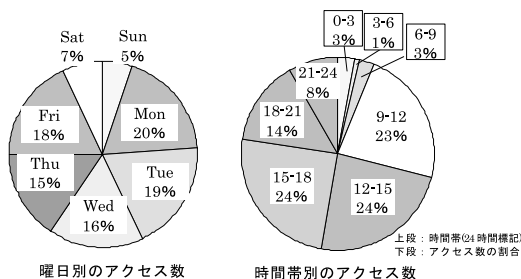
アクセス数の日変化



4月20日の年会ウェブページの設置から、年会1ヶ

月後の10月31日までのアクセス数は総計5,400を数えた。これは、年会参加者数310名の17倍であり、少なめに見積もっても、参加者1人当たり10回程度のアクセスがあったものと見られる。

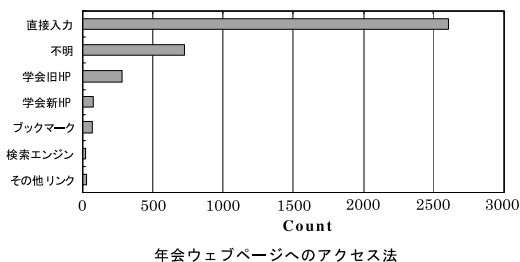
アクセス数を日ごとに追うと、講演申し込み締切日前まではアクセス数がかなり少なく、締切日直前にアクセス数が急激に上昇(363カウント/日:6月28日)しており、それ以降は学会終了までほぼ一定の割合で周期的な変化を示した。わずかに講演要旨締切日と、参加予約締切日、年会開会直前に大きめのピーク(約100カウント/日)が見られる。これは、講演申し込みはすべてウェブページ上から行うことになってきたため、締切日直前になってから初めて年会ウェブページを開く会員が多かったためと見られる。参加事前登録では、講演申込者は参加登録することが決定しているため、締切日直前まで躊躇する必然性がなかったためであろう。このアクセス数の日変化には、周期性が見られるが、これは一週間を周期に変動している。その様子を見るために、次に曜日ごとのアクセス数を概観する。



一般に土日のアクセス数は有意に少なくなり、週日では月曜と金曜が多くなっている。つまり、土日の休みを挟んで週の仕事始めにページアクセスをし、週末に入る前に再びアクセスをするウェブページ訪問者が多いことが伺われる。また、アクセスの時間帯を調べてみると、早朝・深夜が少なくオフィスアワーにあたる午前9時から午後4時前後までが特に多くなっている。これらのことから、ウェブページへのアクセスは一般に大学や研究機関から行われていると見られ、学会員の研究環境ではすでにIT化が十分に進んでいることが伺われる。

最後にウェブページへのアクセス方法、すなわち学会員が年会ウェブページにどのようなルートでアクセスしたかを解析した。その結果、当初予想していたよ

うな、学会の公式ウェブページのリンクから年会ウェブページにアクセスした会員は意外に少なく、むしろ、学会誌などのハードコピー媒体から入手した(と思われる)年会ウェブページのURLを、キーボードから直接入力して当ウェブページにアクセスしたケースが圧倒的に多いことが伺える。



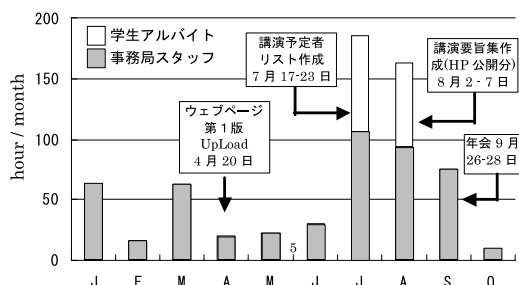
また、このほかに、本ページ閲覧者のPC環境は、OSとブラウザの組み合わせで170通りもあり、かなり多様な環境のもとに本ページへのアクセスをしていることがわかった。ただし、5,400あまりのアクセス数のうち、4,000程度がWindows環境(98, Me, NT)からのアクセスであり、残るアクセス数のほとんどはMacintosh環境からのアクセスであった。使用されているブラウザは、全アクセス数の60%に当たる3,200あまりがInternet Explorer(IE)であることが判明した。これらのことから、当学会でのウェブページ、特にCGIなどを用いるインタラクティブなページの立ち上げに際しては、まず、2002年秋現在で最も流布されているWindows環境+IEという組み合わせでの動作を確認すると同時に、それ以外の多様なシステム環境に対する注意を払った試行が必要となることがわかる。実際のところ、後述するウェブページ運用時の諸問題中、最も重要な問題は、このインタラクティブなページで発生しており、さらにその多くがWindows環境+IEの組み合わせにおいて見られた。

(4) ウェブページ作成と運用に係るLOCの作業量

本年会のLOCが担当したウェブページの実装と運用は、その殆どを著者が一人で行ったため、全体の作業量の把握は容易であった。ただし、年会開催にかかわるIT化の作業とそれ以外の作業とを厳密に切り分けるのは至難であったため、ここでは学会の正式ウェブページ第1版をwwwサーバにアップロードするために要した、調査・作成・試行を年会用ウェブページの作成作業と定義し、その後のPC上での作業の中

で、ウェブページの内容（コンテンツ）にかかわる作業を更新作業と定義した。年会用ウェブページの作成作業時間には、要件定義、方針計画、プロトタイプ作成とその試行に係る時間、およびウェブページ作成方針について、学会ウェブページ担当者との打ち合わせに要した時間が含まれる。また更新作業時間には、更新ページ作成時間とそのアップロード作業時間に加えて、受付者リストの整理（講演者リストや発送リスト作成を含む）やウェブページに関する問い合わせへの対応に要した時間が含まれる。

日毎に実施していた時間管理表の集計結果、ウェブページの作成に要した時間は、約220時間、更新作業に要した時間は460時間となり、総作業量は700時間近くにおよんだ。この作業時間のうち、学生アルバイトに依頼した作業は、IT化との係わりがやや薄い講演者リストの作成などの単純入力作業やインデックス作成であり、それに要した時間は約150時間であったため、IT化に直接係る部分としての総作業量は550時間と見るほうが適切かもしれない。



ウェブページの作成段階でもっとも大きな作業量を要したのは、掲載する内容の検討（要件定義）であった。この段階では、学会ウェブページ担当者との作業分担の検討も浮上したが、今回は幸いにして、学会ウェブページ担当者が検討していた作業分担案と当方の案に一致が見られたため、役割分担に関する打合せは速やかに終了し、その後の作業における実務面や意思疎通の面でも特に問題は生じなかった。それにもかかわらず200時間を越える作業量を必要としたのは、本学会や他学会の年会用ウェブページの枠組み・内容の検討や、実際に運用した場合の問題点、長短所の洗い出しとその結果に基づくプロトタイプの作成に存外時間がかかったためである。したがって、今後年会用ウェブページの書式と内容項目が学会として正式に決定すれば、これらの作業を削減することができ、全体とし

て年会用ウェブページの作成に係る作業を大幅に軽減できると考えられる。

ウェブページ運用時に発生した問題と対策

受付業務部、いわゆるインタラクティブなページとその他の部分とを分離して運営した点に係る直接的な問題は発生しなかった。その他、発生した問題点をあげると以下ようになる。

(1) 講演申し込み時の CGI 上のトラブル

問題：一部の PC 環境からの講演申し込み時に「サーバーエラー」あるいは「確認ボタンを押しても変化がない」という症状が発生した。また、情報が一部抜け落ちたまま送信されたケースも見受けられた。

原因：原因は明らかではないが、Windows 環境でブラウザとして IE を用いた場合に発生する例が確認された。（ただし、この組合せで発生したのはむしろ少数派のようであり、IE のバージョンにより不具合が生じる場合があるらしいことだけがわかった。）

対策：年会用ウェブページのフロントページに、上記エラーの発生を確認した場合、申し込み内容を電子メールにて再送する旨を表示。また、本学会のメーリングリストを利用して、同様の内容を学会員に周知（7月2日付）した。

またこれとは別に、システムの不具合などのために講演申し込みが実際には完了していないにもかかわらず、それに気づかないケースを想定し、講演申込者と参加予約申込者の受付リストをウェブページ上で公開し、申込者本人にウェブ上で確認できるようにした。その結果、講演申込者の約半数が電子メールで申込みをすることとなり、CGI 不具合の程度の大きさが伺えた。

(2) LOC の WWW サーバの不具合

問題：年会ホームページへのアクセスができなくなった。この問題は、上記問題が顕在化した直後の講演申し込み締め切り後の6月29日午後から翌30日にかけて発生した。

原因：LOC の WWW サーバである鹿児島大学理学部サーバに不具合が生じ、システムが停止した。

対策：LOC 側ではメールも使用ができなくなったため、電話での対応のみに終始した。ただし、同問題は講演申し込み締め切後に発生したため、大きな混乱には至らなかった。また、7月1日まで

には復旧し、その後は通常通りの業務を再開した。

(3) 学会メーリングリスト：コンピュータウィルス
問題：年会ウェブページとは直接の関係はないが、年会準備期間中に発生した学会 IT 関連の問題としては、学会メーリングリストを介したコンピュータウィルス（ワーム：WORM_FRE-THEM.K）の流布があった。

原因：特定されてはいないが、メーリングリスト上のアドレス所有者の中にウィルス感染をしていた会員がいた可能性がある。

対策：学会メーリングリストを用いてウィルス警告を発生した後、同メーリングリストを閉鎖した（学会メーリングリスト担当）

このほか、ウェブ上での作業を学会ウェブページ担当と LOC とが分担して行っていたため、連絡先が 2 箇所存在することになり、問合せのメールや電話が頻繁に交叉することとなった。当事者同志では役割分担を明確に取り決め、また為しうる限りウェブページ上でも担当を明確にした上で連絡先を表示したが、混乱を避け得なかった。また、今回、講演申し込みフォーマットがやや煩雑となり、講演申し込み者には多大な負担をかけてしまった。講演者の登録作業上、使用しない項目も数多く発生したので、今回の事例を参考に、今後は申し込みに必要な項目についてもよく吟味していかなければならない。

年会用ウェブページ作成についての提言

今回の年会ウェブページの作成と運用を通じて得られた教訓から、今後の年会運用に係る IT 化についての提言をまとめると以下ようになる。

(1) 年会ウェブページの書式や枠組みの設定 担当：学会本部

年会のウェブページについては、従来 LOC が独自の手法で毎回、思い思いのフォーマットを用いて作成しているのが現状である。このやり方では、時間的、マンパワー的に、多大なコストを要するのみならず、参加・講演申込みにおいて、申込者および受付側の双方に混乱が生じることが避けられない。これらの問題を解決するため、汎用性の高い年会ウェブページの書式や枠組みを設定するべきである。

(2) 年会受付業務（インタラクティブなページによる運用） 担当：学会本部
学会は、LOC が作成する年会ウェブページの枠組

みを設定するとともに、年会参加申込み、および講演申込みのウェブページ（CGI を用いた双方向送受信が可能なウェブページが望ましい）を作成・運用する。危惧していた通り、本年も講演申込みや参加予約申込みなどのインタラクティブなページにおいて不具合が生じ、多くの参加者の方々に多大なご迷惑をおかけした。あらかじめ予想され、その対策も心がけていながら発生したのがこの不具合の特徴である。その原因は、一つには CGI を多用するインタラクティブなページ作成の技術的な困難さが挙げられるが、それ以上に、申込者のシステム環境が多様であるため、すべての環境に対する十分な試行を実施することが困難であることが大きい。こういったインタラクティブなページの作成と安定的な運用については、かなり専門的な技術を必要とする。これを LOC が個別に実施していたのでは、同様の問題が今後とも継続して発生することを避け得ない。また、講演申込みや参加申込みの書式については、例年さほど大きな書式の改変を必要とはしない。したがって、この部分については熟練度の高い IT 技術者、あるいは専門の業者に依頼して CGI を作成し、その運用は学会のウェブページ担当が引き継ぐ形で実施するべきであろう。こうすることにより、一連の年会 IT 関連作業で最も熟練を必要とし、また不具合の発生しやすいインタラクティブなページ作成というアキレス腱から LOC は解放されることになり、年会ウェブページ発足以降、毎年発生している重大な受付業務の不具合の発生をある程度食い止めることが出来るようになる。また、受付業務全般を学会本部が責任を持って担当すれば、LOC の全体の作業負担はかなり軽減される。

(3) 年会ウェブページによる情報発信 担当：LOC

LOC は、上記学会の指定する書式に従い、ウェブページを作成し、年会の基礎的な情報を随時提供する。情報の具体的な内容としては、今回のウェブページの項目が参考になろう。

最新の情報を握る機関が不特定多数に向けて即時的に情報を伝達できるのが、インターネットの特長である。したがって、情報の発信部については、年会の実務部を実質的に担う機関（あるいは個人）が作成、運用するのが効率的であり、またインターネットの即時性を利用する上で最も効果的である。したがって、情報発信の基幹部は、LOC は学会に依存することなく、自ら運用する方がインターネットの特長を生かすことができ、また効率的である。

今回、年会事務局・ウェブページ作成者・更新者がすべて同一人物であったため、更新作業については極めて順調に進めることができた。年会準備段階で問題が生じたとき、あるいは新たな事態が発生したときに、即時性の高いウェブページを用いて情報発信を行うには、情報提供者と情報発信者が極めて近い立場、あるいは同一人物であることが望まれる。この意味において、少なくとも年会ウェブページの更新作業はLOCが独自に行いうる立場である方が良い。

(4) その他

アクセスログの調査結果で意外だったのは、年会ウェブページの閲覧者の多くが、ブラウザに年会ウェブページのURLを自ら手入力してアクセスしていることであり、検索エンジンや学会公式ページからのリンクでたどってきたケースはむしろ稀だったことである。学会員が普段あまり学会ウェブページを閲覧していないことが伺われる一件であった。学会ウェブページの積極的な活用を促すことで、年会ウェブページの運用にも学会員が積極的に協力できる体制をとることが可能となるのではなかろうか。

また、(あまりにも当たり前のことではあるが)ITの活用にあたっては、ウィルス・クラッカー(ハッカー)対策も必要となる。学会および年会のウェブ担当者は、電子メールの送受信において、ウィルスチェックを怠らぬことはもちろんのこと、ウェブページへの攻撃を防ぐためのファイアウォール構築などの対策をとらねばならない。メーリングリストの運用では、受信者もウィルスの発信源となりうるため、学会員一人一人の注意も必要となる。こうした問題について、折にふれて学会員への注意を喚起するのもよいだろう。

以上、嵐のような超多忙な日々も年会後始末と共に一段落が着き、頭がやや冷えたところで拙い意見を述べさせていただいた。今後の年会でのインターネット活用時にいくばくかのお役に立てれば幸いである。

第18期第6回地球化学・宇宙化学 研究連絡委員会議事録

日時：2002年11月14日(木) 13:30~16:00

場所：日本学術会議第4部会会議室(6階)

出席者：田中剛委員長、青木謙一郎、海老原充、日下部実、清水洋、下山晃、留岡和重、中澤高清、中村栄三、松田准一 各委員

報告事項

1. 学術会議関係

1.1 連合部会(2002年10月15日開催。青木委員)

(1) 日本学術会議の在り方について(報告)

総合科学技術会議「日本学術会議の在り方に関する専門調査会」のこれまでの経過と今後のスケジュールについて説明があった。10月16日開催の同専門調査会において中間報告案の取りまとめを行い、10月下旬頃に有識者会合を経て、総合科学技術会議・本会議で中間報告として了承の予定。最終報告案は、11月から12月にかけて専門調査会が検討・取りまとめを行い、12月下旬頃に有識者会合を経て、本会議で最終報告として了承の予定。

(2) 日本学術会議の自己評価結果について(中間報告)

部会、運営審議会、常置委員会、研究連絡委員会、専門委員会、特別委員会などに依頼した自己評価について、回収状況、自己評価結果の概要、活動状況などの概略について説明があった。

(3) 新しい学術体系委員会(報告)

以下の件について説明があった。

価値選択の合理的根拠分科会報告(第二次ドラフト)、俯瞰型研究プロジェクト研究理論分科会「俯瞰型研究プロジェクトについて」報告書(案)、科学論のパラダイム転換分科会「新しい学術体系の提言の構成に向けて(仮題)」(ドラフト案)。

(4) 学術基盤情報常置委員会(報告)

「学術資料の管理・保存・活用体制の確立および専門職員の確保とその養成制度の整備について」(案)の内容説明があった。

1.2 第138回総会(2002年10月16,17日開催。青木委員)

(1) 「価値観の転換と新しいライフスタイル特別委員会」及び「農業・森林の多面的機能に関する特別委員会」の廃止を承認した。

(2) 「文明誌の構築特別委員会」及び「牛綿状脳症(BES)と食品の安全特別委員会」の設置を承認した。

(3) 「日本の計画:Japan Perspective」を学術会議として公表することが承認された。

(4) 次の件について自由討議がなされた。

「日本の計画」の今後の発展の方向、 第27

回 ICSU (国際科学会議) 総会, 日本学術会議の在り方, 日本学術会議の自己点検。

- (5) 第19期学術会議会員選出について
会長から総合科学技術会議「日本学術会議の在り方に関する専門調査会」において日本学術会議の改革について審議検討中であるが、最終報告にはここしばらく時間がかかるので、各学会としては第19期会員選出のための手続きは粛々と進めていただきたいとの要請がなされ、審議結果が分かれば直ちに連絡するとの説明がなされた。

1.3 第4部会(2002年8月22日及び10月15、16日開催。青木委員)

- (1) 平成15年度代表派遣会議及び代表派遣候補者の推薦について

平成14年11月29日までに、平成15年度代表派遣会議推薦書、代表派遣会議調書と代表派遣候補者推薦書を提出。

- (2) 平成16年度科学研究費に係わる「時限付き分科細目の設定」について

10月28日(月)までに、複合領域及び各部毎に1件、分野名、内容、要望理由、関連すると考えられる学協会名を記入のうえ申請する。従来よりも多く採択される可能性がある。第4部では平成15年度に、第5部と合同で「標準」を要望している。

- (3) 学術刊行物指定審査について

第4部としては審査の結果、次の学術刊行物を指定するのが適当とした。

RESEARCHES IN ORGANIC GEOCHEMISTRY (日本有機地球化学会), ORNITHOLOGICAL SCIENCE (日本鳥学会), 医療情報学 (医療情報学会), 日本放射線安全管理学会誌 (放射線安全管理学会)

- (4) 核科学総合研究連絡委員会核融合専門委員会報告(案)について

「核融合研究の新しいあり方について」の説明があり、これを了承した。

- (5) 理学データネットワーク推進小委員会について
第17期に発足した標記委員会の経緯、活動状況、現況等について説明があった。

- (6) 平成16年度国際学術団体分担金要求調書について(依頼)

各研究連絡委員会委員長宛に平成15年3月28日までに提出すよう依頼があった。

1.4 日本学術会議の自己評価に関して、地球化学・

宇宙化学研究連絡委員会から資料を提出した。(田中委員長)

- 1.5 地球化学・宇宙化学研究連絡委員会報告を提出した。(田中委員長)

2. その他

- 2.1 第13回ゴールドシュミット国際会議(2003年9月)の準備状況の報告。(田中委員長, 松田委員)

審議事項

1. 環境学における地球化学についてのアンケート取りまとめ

2001年12月に307機関に発送し、2002年1月末までに回答が寄せられた160通についての田中委員長取りまとめ案が示された。審議の際に出された意見をもとに修正し、「地球化学」誌に投稿することが了承された。また、関連学会誌やホームページでの公表についての意見が出された。

2. 科学研究費細目「地球宇宙化学」キーワードの追加

キーワードの追加について、委員会として基本的には了承した。追加するキーワードについては引き続き検討し、追加の手続きは田中委員長が確認する。

3. 平成15年度代表派遣会議及び代表派遣候補者の推薦について

標記について、該当する委員が委員長に至急連絡することとした。

その他

次回以降の委員会開催予定(2003年2月27日, 5月15日)

東京工業大学大学院総合理工学研究科 環境理工学創造専攻教官公募

東京工業大学大学院総合理工学研究科環境理工学創造専攻では、自然環境講座・物質循環解析分野の助教授または講師1名を以下のように募集いたしておりますので、適任の方がいらっしゃいましたらご推薦をいただきたく御願ひ申し上げます。

記

1. 講座・分野: 自然環境講座・物質循環解析分野
2. 職名: 助教授または講師
3. 職務内容: 環境物質の循環解析に関わる化学的及

び環境学的視点からの講義及び研究指導（9．特記事項を参照のこと。）

4．問合せ先：

〒226 8502 横浜市緑区長津田町4259
東京工業大学フロンティア創造共同研究センター
吉田尚弘
Tel：045 924 5506，Fax：045 924 5506
e-mail：naoyoshi@depe.titech.ac.jp

5．提出書類：履歴書，業績目録（審査つき原著論文，国際会議 proceedings，著書，総説，特許，その他），主要論文別刷（コピー可，5篇以内），これまでの研究概要と今後の研究・教育についての抱負（合わせて2,000字程度），応募者についての照会先2名の連絡先（含電子メール）

6．提出先：

〒226 8502 横浜市緑区長津田町4259
東京工業大学すずかけ台地区庶務課長あて
*「総合理工学研究科・環境理工学創造専攻・自然環境講座・物質循環解析分野助教または講師応募書類」在中と朱書して，書留で送付のこと

7．提出期限：平成15年2月17日（必着）

8．着任時期：決定後なるべく早い時期

9．特記事項：

本分野は環境中における物質循環を化学的および環境学的観点から研究する分野です。今回は2002年4月1日より2007年3月末日までの予定で本学フロンティア創造共同研究センター・共同研究機能・環境系分野で「アイソトポマーの計測・解析法開発」プロジェクトを進める吉田尚弘教授（本専攻および化学環境学専攻併任）のグループと共同で研究・教育を精力的に推進していただける方を募集いたします。任期などについてご質問があれば，上記問合せ先までお問合せ下さい。

第9回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究会開催について

拝啓 皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて，地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究会は，平成3年4月京都市で開催された第1回に続き，第2回（横浜市），第3回（大阪市），第4回（北九州），第5回（東京都品川区），第6回（立正大学），第7回（北海道大学），第8回（京都市）と成功裏に行われました。

この度，第9回の研究会を下記の要領で開催する運びとなりました。つきましては，何かとご多忙のこととは存じますが，是非ともこの研究会にご参加頂きますようご案内申し上げます。

敬具

記

日時：2003年6月19日（木），20日（金） 9：00～17：00
（予定）

場所：つくば国際会議場大ホール（茨城県つくば市竹園2丁目20番3号）

URL <http://www.epochal.or.jp>

主催：(社)日本水環境学会，日本地下水学会，(社)土壌環境センター

後援（予定）：環境省，厚生労働省，茨城県，(社)環境科学会，(社)地下水技術協会，(社)地盤工学会，(社)土木学会，(社)日本化学会，日本環境化学会，(社)日本水道協会，日本地球化学会，(社)日本農芸化学会，(社)日本薬学会，日本陸水学会，廃棄物学会，(社)資源・素材学会，(社)物理探査学会（交渉中も含む）

発表分野：地下水・土壌汚染の実態・原因・経路に関する調査・検討，汚染物質移動の解析・観測，汚染の移動機構，汚染の防止対策・修復技術・観測例・修復評価，汚染の影響評価，産業系排水の管理と地下水・土壌汚染，放射性物質による汚染，地質・土壌に起因する自然汚染など

参加費：一般 8,000円，
学生（開催当日在学中） 5,000円

懇親会：2003年6月19日（木） 18：30～（予定）

（会場）つくば国際会議場多目的ホール（茨城県つくば市竹園2丁目20番3号）

会費：6,000円，人数：約200名

申込み方法：土壌環境センターホームページ（www.gepc.or.jp）上で研究会の参加申込書をクリックして開き必要事項をご入力の上，送信してください。なお参加費は下記郵便局口座に研究会のみ参加の方は8,000円（学生5,000円），研究会・懇親会参加の方は14,000円（11,000円）を振込んでください。ご入金を確認後，研究会参加証，懇親会参加証を送付いたします。また Fax でも受け付けます，別紙申込用紙にご記入の上，振込控えのコピーを貼付して事務局宛に Fax でお申し込みください。お申

込書式は印刷してお使いください。

口座番号：00120 0 538092

口座名義：地下水・土壌研究集会

申込締め切り：2月28日（発表申し込み者），

6月6日（参加申込だけ）

申し込み・問い合わせ先：第9回地下水・土壌汚染とそ
の防止対策に関する研究集会事務局

〒102 0083 東京都千代田区麹町4丁目2番地

第2麹町ビル7階

(社)土壌環境センター 倉石，澤井，土屋

Tel：03 5215 5955，Fax：03 5215 5954

URL <http://www.gepc.or.jp>

Chemical Abstracts 利用法講習会

主催 化学情報協会

Chemical Abstracts (CA) の CD-ROM 版 (CA on CD) の利用方法を中心に，冊子体 Chemical Abstracts の構成，特徴などもあわせて説明します。普段図書室や研究室で CA をご利用の研究者，教官の方や司書の方に最適です。

日時：平成15年2月13日(木) 13：30～16：00

東京会場

平成15年3月11日(火) 13：30～16：00

大阪会場

会場：東京会場：中居ビル6 F

(東京都文京区本駒込6 25 4)

大阪会場：千里ライフサイエンスセンタービル

10 F

(大阪府豊中市新千里東町1 4 2)

内容：1．Chemical Abstracts の構成

2．Chemical Abstracts の各索引の特徴

3．CA on CD の概要および使い方

受講料：無料

参加申込締切：定員（12名）になり次第締切

申し込み先：

〒113 0021 東京都文京区本駒込6 25 4 中居ビル

(社)化学情報協会 講習会係

Tel：03 5978 3621

e-mail：lecture@jaici.or.jp

訃報：野崎義行会員



東京大学海洋研究所教授野崎義行先生は平成15年1月4日、解離性大動脈瘤破裂のため急逝されました。享年56歳でした。

先生は1974年に北海道大学水産学部において学位を取得後、米国のイェール大学地質・地球物理学部、ウッズホール海洋研究所において研究に従事され、1979年、東京大学海洋研究所海洋無機化学部門助教授となり、1992年、同部門教授に昇任されました。

先生は、一貫して海洋地球化学分野において世界に先駆けた多くの優れた研究成果を上げ続け、日本の海洋地球化学を牽引する存在でありました。その

功績は1977年に日本海洋学会岡田賞、1998年には日本海洋学会賞、そして2001年には「海洋における天然放射性核種と希土類元素の分布と変動に関する地球科学的研究」について、日本地球化学会学会賞を受賞されたことから学会を越えて認められていました。また、2002年からは本学会の評議員を勤めておられました。海洋と地球環境の科学の啓蒙活動として出版された「地球温暖化と海」(平成6年、東大出版会)は現在も多くの学生や研究者に高い評価を受けております。世界の研究者から常に注目され、日本の海洋地球化学のリーダーであった先生を突然失ったことは、痛惜の念に耐えられません。謹んでご冥福をお祈りいたします。

(東京大学海洋研究所無機化学分野 小畑 元)

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

皆様の情報・原稿をお待ちしています。地球化学に関連した研究集会、シンポジウムの案内、人材募集、書評、研究機関の紹介など何でも結構です。編集の都合上、電子メール、フロッピー(マックもしくはDos/Vいずれでも結構です)での原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2003年5月上旬頃を予定しています。ニュース原稿は3月下旬までにお送りいただくよう、お願いいたします。また、ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者

米田成一

〒169 0073 東京都新宿区百人町3 23 1
国立科学博物館理工学研究部
Tel : 03 3364 7142, Fax : 03 3364 7104,
e-mail : s-yoneda@kahaku.go.jp

高橋和也

〒351 0198 埼玉県和光市広沢2 1
理化学研究所加速器基盤研究部

小林貴之(ホームページ)

〒156 8550 東京都世田谷区桜上水3 25 40
日本大学文理学部